

泉大津市式内町他

東雲遺跡隣接地

南海本線連続立体交差事業に伴う発掘調査(確認)報告書

財団法人 大阪府文化財センター

序 文

泉大津市とその周辺は、国史跡に指定された池上曾根遺跡を筆頭として、数多くの歴史的遺産に恵まれた地域として知られています。今回の調査地の周辺でも、古墳時代や中世の集落が見つかった東雲遺跡、弥生・古墳時代の遺物散布地である助松遺跡などの遺跡が分布しているほか、北西に近接する紀州街道沿いには近世の街並みが広がっていたと考えられます。

今回の調査では古墳時代から江戸時代まで様々な時代の土器が出土したことで、いにしえよりこの地に人々が住み続けていたことを裏付ける結果が得られました。また、中世以降の耕作の跡は、そうした人々の活動や土地利用のあり方の一端を示すものといえます。調査を行った面積そのものは広くありませんが、約2kmにわたる長い路線を調査したことにより、これまでよく実態が分かっていた南海本線沿線地域の歴史・地理的環境を検討する上で、重要な知見を得ることができました。

調査および報告書作成に当りご指導、ご協力をいただきました大阪府教育委員会文化財保護課、南海電気鉄道株式会社ならびに周辺住民の皆様を始めとする関係各位に感謝の意を表しますとともに、今後とも当センターの事業にご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

2004年11月

財団法人 大阪府文化財センター
理事長 水野 正 好

例 言

1. 本書は大阪府泉大津市式内町他で行われた東雲遺跡隣接地(確認)04-1発掘調査報告書である。
2. 調査は南海電気鉄道株式会社から財団法人大阪府文化財センターが平成16年10月1日～11月30日の間委託を受けた。現地調査は10月4日から10月27日まで、整理作業は10月28日から11月30日まで行い、11月30日本書刊行をもって完了した。
3. 調査は以下の体制で実施した。
調査部長玉井功、南部調査事務所長藤田憲司、調査第一係長岡本敏行、主任技師立花正治〔遺物写真〕、技師池田研、非常勤専門調査員岡田佳之、調整課長赤木克視、調整係長森屋直樹、主査山上弘。
4. 本調査の基準点測量は株式会社フオックスに委託した。
5. 本書の執筆・編集は池田・岡田が担当した。
6. 本調査の出土遺物ならびに写真・実測図などの資料は、財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。

凡 例

1. 挿図中の方位は座標北を示し、座標値のあるものは「測地成果2000」(世界測地系)に基づく国土平面直角座標第VI系の値である。
2. 設定したトレンチの主軸は北東－南西方向であるが、北東・南東・南西・北西の各壁断面については煩雑を避けるために各々、北・東・南・西壁断面と呼称している。
3. 水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中では $TP \pm 〇m$ と記した。
4. 本書で用いた地層の土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帳』2003年版を使用した。
5. 遺構番号はトレンチごとに1番から付した連番と、遺構名称で表現する。
6. 遺物は本書での通し番号を順に付した。また、細片のみのため実測図を省略し、写真図版中で報告している。

目次

序文

例言

凡例

第1章 立地環境と調査の経緯・経過	1	
第1節 調査の経緯と経過	1	
第2節 歴史・地理的環境と既往の調査	2	
第2章 調査成果	3	
1) 1-1 トレンチ	2) 1-2 トレンチ	3) 1-3 トレンチ
4) 2-1 トレンチ	5) 2-2 トレンチ	6) 2-3 トレンチ
7) 4-1 トレンチ	8) 4-2 トレンチ	9) 4-3 トレンチ
第3章 まとめ	9	

挿図目次

図1 調査地周辺の遺跡とトレンチ配置図 ..	1	図8 2-2 トレンチ遺構平面図	6
図2 1-1 トレンチ北壁地層断面	3	図9 2-3 トレンチ西壁地層断面	6
図3 1-2 トレンチ西壁地層断面	4	図10 4-1 トレンチ東壁地層断面	7
図4 1-2 トレンチ遺構平面図	4	図11 4-2 トレンチ東壁地層断面	7
図5 1-3 トレンチ東壁地層断面	4	図12 4-3 トレンチ西壁地層断面	8
図6 2-1 トレンチ西壁地層断面	5	図13 4-3 トレンチ遺構平面図	8
図7 2-2 トレンチ西壁地層断面	5	図14 各トレンチの地層断面模式図	9

図版目次

図版1 調査地遠景と1工区各トレンチ	図版3 出土遺物(中世以前)
図版2 2・4工区各トレンチ	図版4 出土遺物(近世)

第1章 立地環境と調査の経緯・経過

第1節 調査の経緯と経過

南海本線連続立体交差事業は平成8年度に認可を受けた都市計画事業で、踏切部における交通渋滞や市街地の分断などの解消を目的として、都市計画道路松之浜曾根線から終点の大津川右岸までの区間の鉄道高架化工事と関連側道の整備工事を行うものである。本調査は当事業に先立ち、埋蔵文化財の広がりや深さを確認し、その保存のために必要な資料を得ることを目的として実施した。

調査に当り、泉大津駅・松ノ浜駅を挟む南海本線沿い約2kmの間に、面積6m²(2m×3m)のトレンチを合計9箇所設定した。トレンチは当事業に関する工区のうち、1・2・4工区に各々3箇所設定しており、トレンチ番号は各工区番号に続いて北から1～3の番号を付している(図1)。調査は北東端の1-1トレンチから順次、南西端の4-3トレンチに向けて実施した。

現地調査は平成16年10月4日から開始し、現代盛土層を重機で掘削した後、以下を人力で掘削した。地層断面を中心とした調査の結果、中・近世の耕作土層とみられる地層が広く分布していることが確認された。それらの地層からは、耕作で巻上げられたとみられる古墳時代や古代の遺物を含め、幅広い時代の遺物が出土したが、遺構は耕作に係わるものを主として、少数が検出されたのみである。

また、各トレンチの調査と並行して、委託した基準点測量を10月18日から25日にかけて実施した。10月27日には現地調査を終了し、引き続き整理・報告書作成作業を行った。

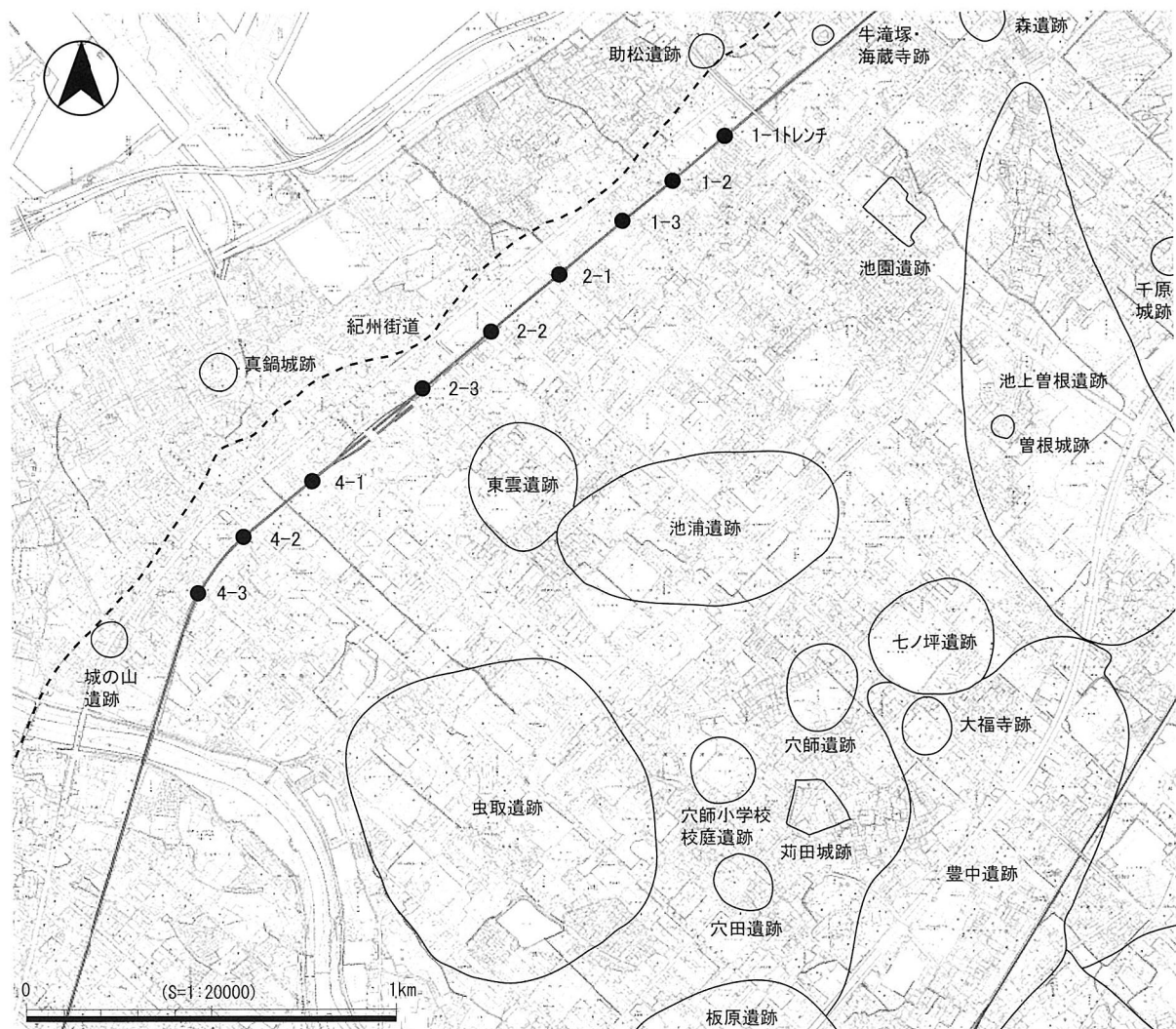


図1 調査地周辺の遺跡とトレンチ配置図

第2節 歴史・地理的環境と既往の調査

泉大津市は大阪府西南部の臨海地帯に位置しており、南北に発達した丘陵地形の北側に形成された狭小な沖積地上に立地している。調査地のすぐ南には和泉山脈を源とする大津川が大阪湾に注いでいるが、それ以外に大きな河川はなく、かつては多数の溜池が存在していた。

温暖な気候に恵まれたことで、古くから人々の生活の場として開けていたとみられ、市内の遺跡は20箇所余りにのぼる。東雲遺跡など今回の調査地と地理的あるいは時期的に関連の深い遺跡を見てみると、まず古墳時代に関しては、豊中遺跡・七ノ坪遺跡・東雲遺跡などで集落が見つかっている。これまでの調査では、豊中遺跡で竪穴住居・掘立柱建物・井戸・溝など[豊中・古池遺跡調査会1976ほか]、七ノ坪遺跡で竪穴住居・水田・方形周溝墓など[大阪府教育委員会1974ほか]が検出されている。

東雲遺跡では1977年、南海本線泉大津駅の東約450mの地点で、大阪府南部流域下水道・南大阪湾岸工区事務所の建設工事に伴う調査が行われ、竪穴住居2棟・井戸2基・溝2条などの古墳時代前期の遺構が検出された[豊中・古池遺跡調査会1977・泉大津市史編さん委員会2004]。さらに、その南東側で1986年に行われた調査では、掘立柱建物・河川状遺構・溝などに加え、総数130にのぼるピットが検出された。これらの大半は古墳時代から飛鳥時代にかけてのものと考えられ、土師器・須恵器・滑石製紡錘車・緑色片岩製双孔円板・土錘などの遺物が多数出土している[泉大津市教育委員会1987]。また、当遺跡では埴輪片が出土していることから、古墳や祭祀遺構との関連でも重要な遺跡と考えられている[泉大津市教育委員会1991]。その他、遺物散布地としては調査地に近い助松遺跡をはじめ、板原・虫取・穴師遺跡などが知られている。

次に、平安～室町時代に関しては豊中・板原・東雲遺跡などで集落が見つかっている。豊中遺跡では遺跡の西部を中心に、多数の井戸をはじめ、掘立柱建物・土坑など11～14世紀の遺構が検出されており、周辺地域における集落の中心部分であったと考えられている[泉大津市教育委員会1995]。また、板原遺跡でも鎌倉時代の掘立柱建物7棟が検出されている[大阪府教育委員会1980]。東雲遺跡では1977年の調査で、16棟の掘立柱建物が検出された。それらの建物は平安時代に始まり、鎌倉時代初期に至るが、主軸の方向から4時期に分けられると推定されている[豊中・古池遺跡調査会 前掲書]。この他、荻田城・真鍋城・千原城・城の山などは中世の城館跡と考えられており、遺物散布地としては虫取・穴師遺跡などがある。

最後に、近世に関しては今回の調査地の北西側を紀州街道が南西―北東方向に延びていた。紀州街道は大坂と紀州を結ぶ幹線道路として整備され、参勤交代の経路となっていたことが知られており、街道沿いには宿場町などの街並みが広がっていたと考えられる。

第2章 調査成果

1) 1-1 トレンチ(図2、写真図版1)

第6層上面まで平面調査を行った後、最終的に深掘り部でGL-1.9mまで断面調査を行った。本トレンチでは中・近世のものとみられる耕作土層を検出した。基本層序と出土遺物は以下の通りである。

第0層は灰白色(5Y7/1)細礫混り砂質シルトからなる現代盛土層である。第1層はにぶい褐色(10YR6/3)砂混りシルトからなり、層厚は10cm程度である。マンガン斑が観察される。1897(明治30)年前後に軌道が敷かれる以前の近代耕作土層とみられる。第2層は淡黄色(2.5Y8/3)砂混り粘土質シルトからなり、層厚は7cm程度である。近世の耕作土層とみられる。第3層は灰白色(10YR7/1)砂・細礫混りシルト質粘土からなり、層厚は5cm程度である。中世の耕作土層と考えられる。第4層は明黄褐色(10YR7/6)シルト混り粘土からなり、層厚は15cm程度である。植物根痕跡が多数観察された。

第5～9層は粘土を主体としている。第5層はにぶい黄橙色(10YR6/4)シルト混り粘土からなり、層厚は18cm程度である。マンガン斑や植物根痕跡が多数観察され、暗色化している。第6層は黄色(2.5Y8/6)シルト混り粘土からなり、層厚は13cm程度である。第7層はにぶい黄橙色(10YR6/3)砂・細礫混りシルト質粘土からなり、淘汰が悪い。層厚は10cm程度である。第8層は灰黄褐色(10YR6/2)砂混りシルト質粘土からなり、層厚は5cm程度である。分布は部分的で、薄く暗色化している。第9層は明黄褐色(10YR7/6)砂礫質シルト混り粘土からなり、淘汰が悪い。

第10層以下は水成および滞水の状態で堆積したとみられる砂泥層で構成されていた。第10層は灰白色(N7/0)中～粗粒砂、第11層は黄灰色(2.5Y5/1)中～粗粒砂からなり、ともに層厚は20cm程度である。第12層は灰色(N5/0)シルト～粘土からなり、層厚は18cm以上である。植物遺体を多く含む。

以上の地層のうち、第3層では土師器・須恵器・瓦器などが、第4層では少量の土師器が出土した。また、暗色帯構成層の第5・8層では上下面を精査したが、遺構は検出されなかった。

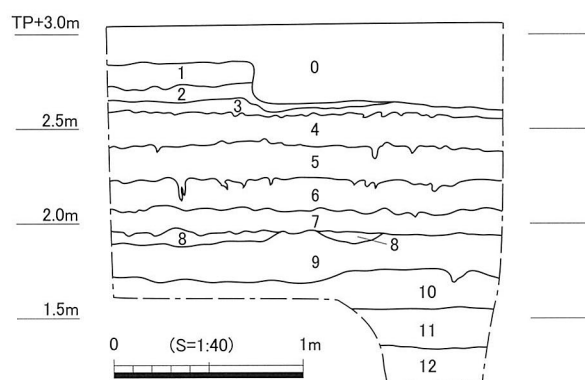


図2 1-1 トレンチ北壁地層断面

2) 1-2 トレンチ

第4層上面まで平面調査を行った後、最終的に深掘り部でGL-1.4mまで断面調査を行った。本トレンチでは中・近世のものとみられる耕作土層や、溝・耕作溝・ピットなどの遺構を検出した。

a. 基本層序と各層の出土遺物(図3、写真図版1・3)

第0層は灰白色(10YR7/1)礫混り砂質シルトからなる現代盛土層である。第1層は灰色(10YR6/1)礫混り砂質シルトからなり、層厚は8cm程度である。近代の耕作土層とみられるが、偽礫を含んでおり盛土層の可能性もある。第2層は明緑灰色(7.5GY7/1)礫混り砂質シルトからなり、層厚は8cm程度である。中世の耕作土層とみられる。第3層は黄橙色(10YR7/8)極細粒砂混りシルトからなり、層厚は30cm程度である。第4層の上部が土壌化したものとみられ、酸化鉄斑が観察された。第4層は灰白色(2.5Y7/1)極細～細粒砂からなり、水成層とみられる。層厚は70cm以上である。

これらの地層のうち、第2層からは土師器・須恵器・瓦器・白磁など多くの遺物が出土した。4～6は土師器で、4・6は皿である。4は大きく歪んでいるが、口縁部径は8.5cm前後に復元された。口縁部を回転ナゲにより調整している。5は羽釜の鏝部である。端部は面をなしており、胎土にはチャートを含む。15～17・20は須恵器で、15は甕、16・17は蓋杯、20は高杯の脚部とみられる。15の内面には当て具痕が、16の外面には3本の直線からなるヘラ記号がある。17は立上がりが短く、TK209型式に属するものであろう。

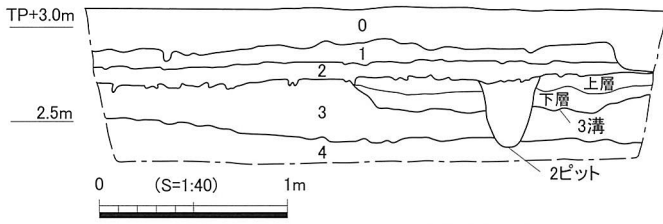


図3 1-2トレンチ西壁地層断面

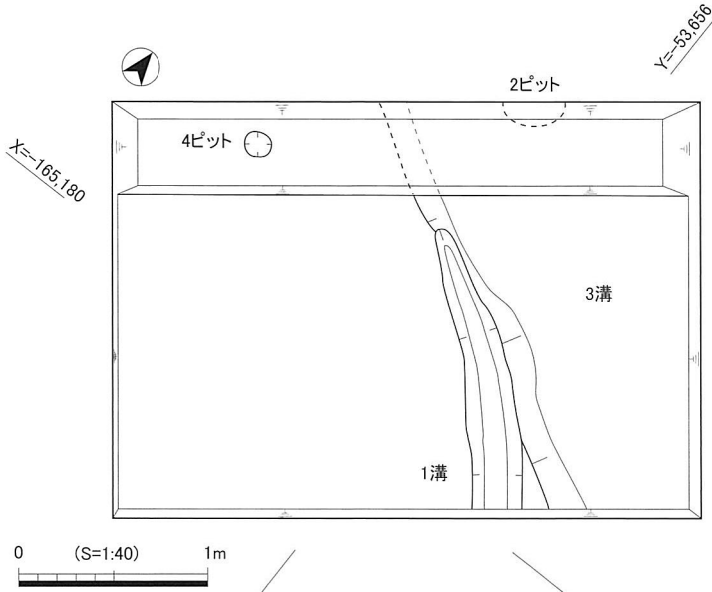


図4 1-2トレンチ遺構平面図

る。13は甕の体部で、外面にはタタキの上からカキメを施している。側溝から出土した12は同一個体とみられる。14も甕の体部とみられるが、他の資料と異なり内外面をきれいにナデ調整しており、タタキメや当て具痕は観察されない。焼成も他の資料と比べ良好である。19は甕で、段と凹線文の間には波状文を施している。これらの遺物には古墳時代後期のものを中心に、3・14など中期に遡る可能性のあるものが一部に含まれている。しかしながら、1・2など中世のものとみられる遺物が少量ではあるが伴うことから、それらの遺物が本遺構の時期を示すものと考えられる。

2ピット 西壁断面で検出したピットで、3溝を切る。直径0.30m、深さ0.35m程度で、埋土は明黄褐色(10YR7/6)極細～細粒砂混りシルトからなる。遺物は出土していない。

4ピット 西側溝で検出したピットで直径0.15m程度である。埋土は灰色(N6/0)極細～細粒砂混りシルトからなり、土師器片や炭を含む。掘削せず埋め戻したため、深さは不明である。

3) 1-3トレンチ(図5、写真図版1・3・4)

第6層上面まで平面調査を行い、中・近世の耕作土層およびその床土とみられる地層を検出した。

第0層は黄褐色(10YR5/6)中粒砂からなる現代盛土層である。第1層はオリーブ黒色(7.5Y3/2)砂質シルトからなり、層厚は10cm程度である。近代の耕作土層とみられ、下面では北東-南西方向の耕作溝を検出した。第2層は灰オリーブ色(7.5Y4/2)極細～中粒砂混りシルトからなり、層厚は13cm程度である。第3層は灰色(7.5Y5/1)シルト混り粘土からなり、層厚は7cm程度である。第2・3層は中世の耕作土層とその床土とみられる。以上の各層の

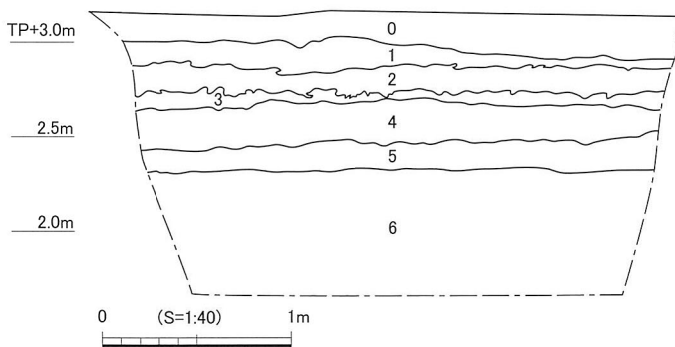


図5 1-3トレンチ東壁地層断面

b. 遺構と出土遺物(図3・4、写真図版1・3)

第2層下面では1溝を、第3層上面では2・4ピットと3溝を検出した。

1溝 耕作土層である第2層段階の耕作溝とみられ、幅0.25m、深さ0.05m程度である。土師器・須恵器が少量出土した。

3溝 一方の肩を検出したのみであるが、北西-南東方向に延びる溝とみられる。幅1.1m以上、深さ0.1m程度である。埋土は2層に細分され、上層はにぶい黄橙色(10YR7/3)砂混りシルトからなり、炭・焼土を含む。下層は褐灰色(10YR6/1)極細～粗粒砂からなる水成層である。

埋土下層からは土師器1~3、須恵器13・14・19などの遺物が多く出土した。1・2は同一個体の皿とみられ、口縁部径は7.4cmに復元された。内面には煤が付着している。3は直口壺の口頸部であろう。口縁端部は面をなしており、頸部外面の調整はハケとみられる。

うち、第2・3層からは土師器・須恵器・瓦器などが出土した。側溝出土の中国製白磁碗8も、これらの層に伴うものであろう。口縁部は玉縁状で、横田賢次郎・森田勉による分類の第IV類[横田賢次郎・森田勉1978]に属し、11～12世紀のものと考えられる。その他、重機掘削中に土錘39が出土している。

砂礫を主体とする第4層以下は自然堆積層とみられ、遺構・遺物は検出されなかった。第4層は暗緑灰色(7.5GY4/1)砂礫からなり、層厚は20cm程度である。上部には鉄分の沈着が観察される。第5層は緑灰色(7.5GY5/1)極細～細粒砂からなり、層厚は14cm程度である。第6層は灰色(5Y5/1)砂礫からなり、層厚は65cm以上である。

4) 2-1 トレンチ(図6、写真図版2～4)

第6層上面まで平面調査を行い、中・近世の耕作土層とみられる地層を検出した。

第0層は褐色(7.5Y4/6)細粒砂からなる現代盛土層である。第1層は黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルトからなり、層厚は17cm程度である。近世から近代にかけての耕作土層とみられ、下面では北西-南東方向の耕作溝が複数検出された。第2層は黄褐色(2.5Y5/4)砂混りシルトからなり、層厚は13cm程度である。下面は凹凸が著しく、中世の耕作土層とみられる。第3層はオリーブ褐色(2.5Y4/4)粘土質シルトからなり、層厚は7cm程度である。第4層の上部が土壌化したものと考えられる。

以上の各層のうち第1層からは土師器、三島手の唐津焼28をはじめとする近世の陶磁器、土錘36～38など多くの遺物が出土した。また、第2層からは土師器・須恵器・瓦器が、第3層からは土師器・須恵器が出土している。第3層から出土した11は古代の須恵器壺の体部とみられる。外面には部分的に自然釉が付着している。

第4～6層は滞水状態で堆積した一連の地層で、粘土を主体とする。第4層は灰色(5Y4/1)、第5層は黄灰色(2.5Y4/1)、第6層は黒褐色(2.5Y3/1)の粘土からなる。第4・5層はマンガン斑や植物根痕跡が多く見られ、第6層はやや暗色化している。

第7層以下は水成層とみられ、砂礫を主体としている。第7層は黄灰色(2.5Y5/1)細粒砂、第8層は灰色(5Y4/1)砂礫からなり、層厚は第7層が15cm、第8層が4cm以上である。

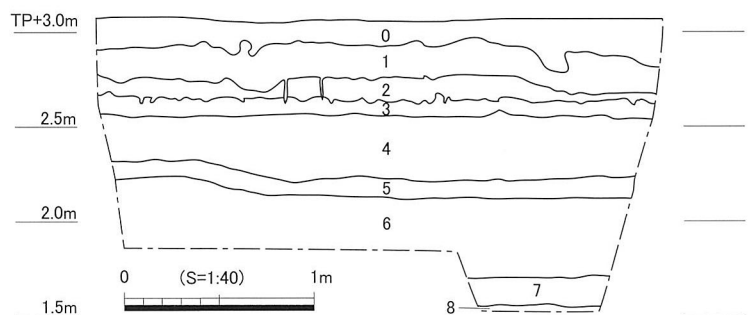


図6 2-1 トレンチ西壁地層断面

5) 2-2 トレンチ(図7・8、写真図版2～4)

第7層上面まで平面調査を行い、中・近世のものともみられる耕作土層や耕作に伴う遺構を検出した。

第0層は灰色(5Y4/1)砂礫からなる現代盛土層である。第1層は暗オリーブ灰色(5GY4/1)砂質シルトからなり、層厚は15cm程度である。近代の耕作土層とみられる。第2層はオリーブ灰色(5GY5/1)砂質シルトからなり、層厚は8cm程度である。第3層起源のシルト偽礫を多く含む。近世の耕作土層とみられ、下面では北西-南東方向の耕作溝群を検出した。第3層は灰色(7.5Y6/1)シルトからなり、層厚は6cm程度である。下面では鋤・鍬痕とみられる下駄の歯状の痕跡を検出した。以上の各層からは土師器・須恵器・瓦器などが多く出土した。10は第1層から出土した瓦質土器で、タタキを施している。9は第2層から出土した瓦器皿で、口縁部径は10cm前後に復元された。7は第3層から出土した瓦器碗である。このほか重機掘削中に土錘32が出土した。

第4～7層は粘土を主体としている。第5・7層は暗色化が観察されたが、遺構・遺物は検出されなかった。第4層は灰オリーブ色(5Y5/2)シルト混り粘土、第5層は黒褐色(2.5Y3/

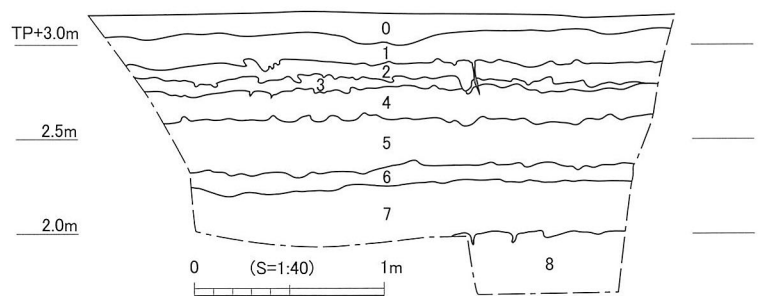


図7 2-2 トレンチ西壁地層断面

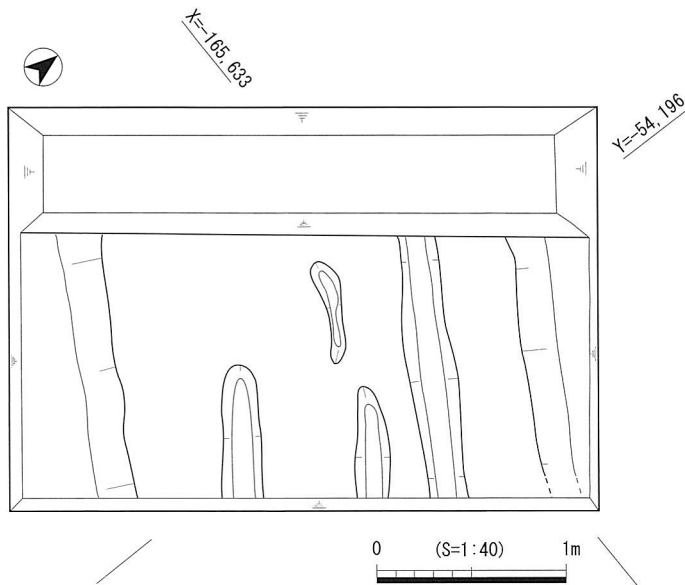


図8 2-2トレンチ遺構平面図

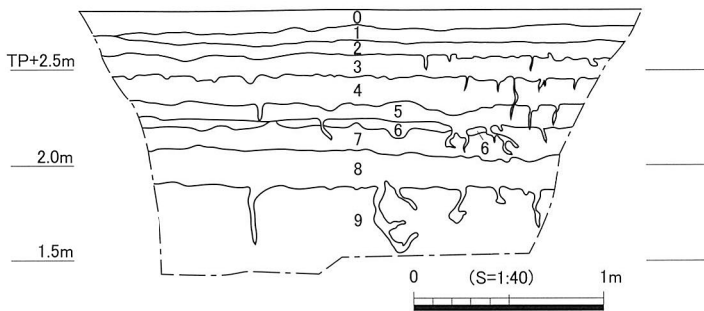


図9 2-3トレンチ西壁地層断面

2)、第6層は褐灰色(10Y4/1)、第7層は黒褐色(10Y3/1)の粘土からなる。層厚は各々15cm、25cm、8cm、25cm程度で、第4層には酸化鉄斑が、第6・7層にはマンガン斑が観察される。

第8層は灰色(5Y6/1)シルト～極細粒砂からなり、層厚は30cm以上である。下方粗粒化が見られ、水成層と考えられる。

6) 2-3トレンチ(図9、写真図版2・4)

第9層上面まで平面調査を行い、中・近世の耕作土層とみられる地層を検出した。

第0層は浅黄色(5Y7/4)粘土～礫からなる現代盛土層である。第1層は灰オリブ色(5Y4/2)シルト質極細粒砂からなり、層厚は6cm程度である。近代の耕作土層とみられる。第2層は灰色(10Y4/1)礫混り砂質シルトからなり、層厚は7cm程度である。中世の耕作土層とみられ、土師器や土錘35が出土した。

第3層以下では暗色帯構成層の第4・8層を含め、遺構・遺物は検出されなかった。第3層はオリブ黒色(7.5Y3/1)シルト混り粘土からなり、層厚は10cm程度である。第4層はオリブ黒色(5Y3/1)

砂質シルトからなり、層厚は15cm程度である。第5層は暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト混り砂からなり、層厚は7cm程度である。淘汰が悪く、下面では植物根痕跡が観察された。第6層は明黄褐色(2.5Y6/6)シルト～極細粒砂からなり、層厚は4cm程度である。部分的にラミナ構造が観察された。第7層は黄灰色(2.5Y4/1)粘土からなり、層厚は12cm程度である。上部には鉄分が沈着する。第8層は黒褐色(2.5Y3/1)極細粒砂質シルトからなり、層厚は18cm程度である。下面では植物根痕跡が観察された。第9層はオリブ灰色(2.5GY5/1)シルト～細粒砂からなる水成層で、下方粗粒化する。層厚は35cm以上である。

7) 4-1トレンチ(図10、写真図版2～4)

第9層上面まで平面調査を行った後、最終的に深掘り部でGL-2.0mまで断面調査を行った。本トレンチでは中・近世の耕作土層とみられる地層を検出した。

第0層は黄褐色(10YR5/6)礫混り細粒砂からなる現代盛土層である。第1層はオリブ黒色(10Y3/1)礫混りシルト質極細粒砂からなり、層厚は22cm程度である。近代の耕作土層とみられる。第1層からは土師器・須恵器・肥前陶磁器などが出土した。いわゆる「くらわんか」碗とみられる23は18世紀、口縁部内面に多条の直線からなる文様帯をもつ24は19世紀代の肥前磁器染付とみられる。

第2層は暗オリブ灰色(5GY4/1)極細粒砂質シルトからなり、層厚は10cm程度である。炭や焼土を含む。第3層は灰オリブ色(7.5Y5/2)極細粒砂混りシルトからなり、層厚は7cm程度である。褐色粘土の偽礫を含み、下面では不定形な落込みが検出された。第4層は灰色(7.5Y4/1)礫混り細～粗粒砂からなり、層厚は5cm程度である。第5層は暗緑灰色(10GY4/1)極細粒砂質シルトからなり、層厚は10cm程度である。下面は凹凸が顕著である。第2・3・5層は近世の耕作土層、第4層はラミナ構造は観察されないが水成層とみられ、第2～5層からは近世の陶磁器・瓦・土錘などの遺物が多数出土している。30は第3層から出土した丹波焼播鉢で、口縁部は肥厚せず、断面は三角形を呈する。17世紀後半

のものとみられる。27は第5層から出土した肥前磁器染付碗で、高台径は3.9cmである。外面は一重網目文で、17世紀代のものである。重機掘削中に出土した京信楽系陶器の行平蓋とみられる25もこれらの地層に伴うものであろう。44は第2層から出土した軒丸瓦である。土錘は5点が出土しており、33・34が第3層、40～42は第5層に伴うものである。このほか、18は第2層から出土した須恵器蓋杯、21は第5層から出土した須恵器甕の体部である。18の外面には反時計回りのヘラケズリが狭い範囲に施されている。21の外面にはタタキの上からカキメが施されており、内面には当て具痕が残る。いずれも耕作により下位層から巻上げられたものであろう。

第6層は灰色(5Y5/1)砂混りシルトからなり、層厚は6cm程度である。第7層起源の粘土偽礫を多く含み、下面は凹凸が著しい。中世の耕作土層とみられ、下面では不定形の落込みを検出した。本層からは土師器・須恵器などの遺物が出土している。

第7層以下では遺構・遺物は検出されなかった。第7層は浅黄色(2.5Y7/4)粘土からなり、層厚は20cm程度である。第8層は暗色帯構成層で、黄灰色(2.5Y4/1～5/1)粘土からなる第8a・8b層、黒褐色(2.5Y3/1)粘土からなる第8c層に細分される。層厚は第8a層が5cm、第8b層は10cm、第8c層は4cm程度で、暗色化の程度は第8a・8c層が強く、第8b層は弱い。部分的にラミナ状の炭化物が観察され、滞水の状態で堆積したと考えられる。第9層は黄灰色(2.5Y5/1)砂礫からなり、層厚は65cm程度である。第10層は灰色(N6/0)極細粒砂からなり、水成層とみられる。層厚は10cm以上である。

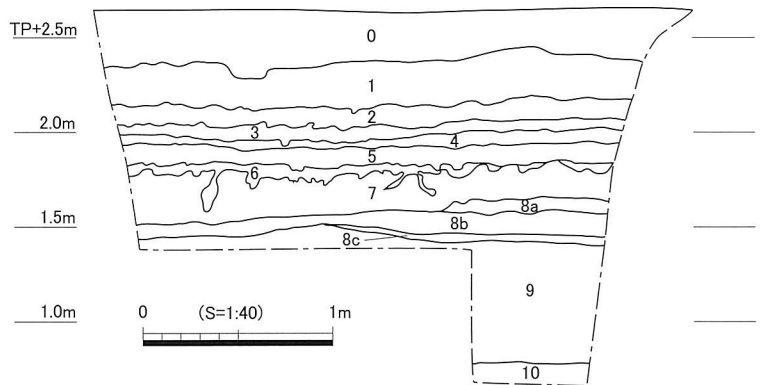


図10 4-1 トレンチ東壁地層断面

8) 4-2 トレンチ(図11、写真図版2・4)

第6層上面まで平面調査を行い、中・近世の耕作土層を検出した。

第0層は明黄褐色(10YR7/6)砂礫からなる現代盛土層である。第1層はオリーブ黒色(10Y3/1)砂混りシルトからなり、層厚は15cm程度である。炭・焼土を含み、近代の耕作土層とみられる。第2層は暗青灰色(5BG3/1)砂質シルトからなり、層厚は10cm程度である。近世の耕作土層とみられる。第1・2層からは近世の陶磁器や瓦などの遺物が多く出土した。29は第1層から出土した丹波焼播鉢、43は第2層から出土した丸瓦である。そのほか、重機掘削中に出土した肥前磁器の染付22や青磁31、京信楽系の徳利とみられる26はいずれもこれらの層に伴うものであろう。31は高台径が4.5cmで、高台内は無軸である。26は高台径が5.7cmで、底部外面および内面を除いて緑色釉がかかる。

第3層は緑灰色(10G6/1)砂混り粘土質シルトからなり、浅黄色シルトの偽礫を含む。分布は部分的で、層厚は15cm程度である。中世の耕作土層とみられ、下面では長径が1.5m以上の不整形な落込みを検出した。同層からは土師器が出土している。

第4層以下では遺構・遺物は検出されなかった。第4層は明黄褐色(10YR7/6)シルト混り砂からなり、淘汰が悪い。層厚は20～30cm程度である。暗色帯構成層である第5層は褐灰色(10YR5/1)砂混りシルトからなり、層厚は13cm程度である。第6層は灰白色(10YR7/1)中～粗粒砂からなり、層厚は25cm以上である。第4～6層では植物根痕跡が多数観察された。

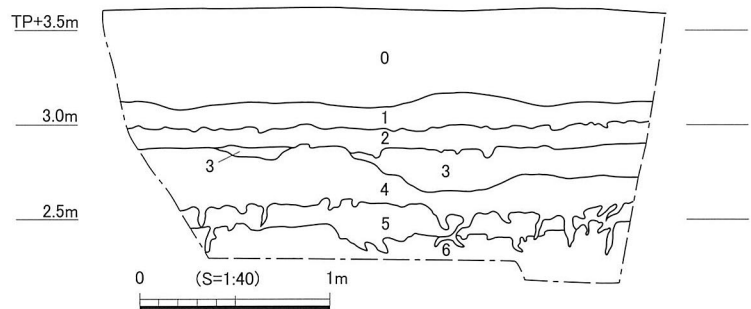


図11 4-2 トレンチ東壁地層断面

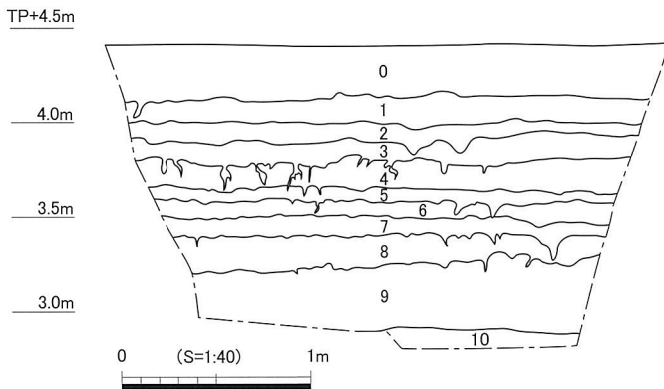


図12 4-3トレンチ西壁地層断面

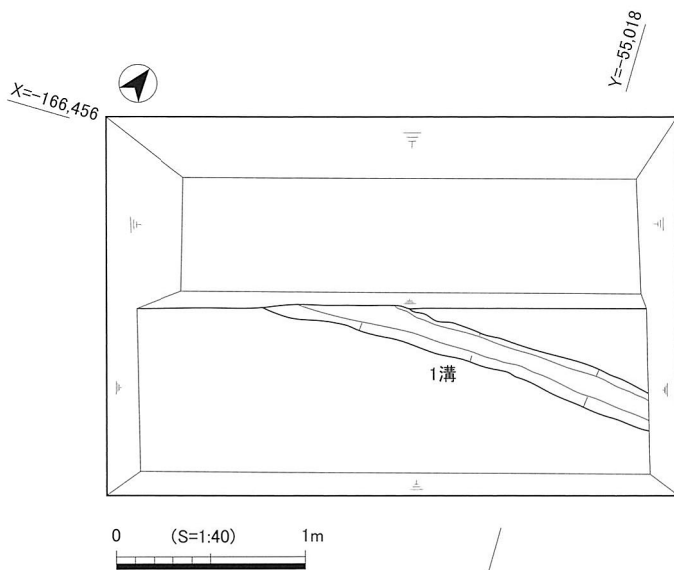


図13 4-3トレンチ遺構平面図

9) 4-3 トレンチ (図12・13、写真図版2)

第7層上面まで平面調査を行い、中・近世の遺構とみられる溝や、耕作土層を検出した。

第0層は黄褐色(2.5Y5/3)粘土～礫からなる現代盛土層である。第1層はオリーブ黒色(10Y3/1)シルト質極細粒砂からなり、層厚は12cm程度である。近代の耕作土層とみられる。第2層は暗緑灰色(10G3/1)シルト質極細～細粒砂からなり、粘土偽礫を多く含む。層厚は10cm程度である。近世の耕作土層とみられ、下面では不定形な落込みを検出した。

第3層は緑灰色(10GY5/1)シルト混り極細～粗粒砂からなり、層厚は10cm程度である。本層は砂質が強いが、淘汰が悪く、小偽礫が含まれている。水成層を母材とした、中世から近世にかけての耕作土層と考えられる。

第4層上面では東北東-西南西方向に延びる1溝を検出した。幅0.20m、深さ0.05m程度で、埋土は灰色(7.5Y4/1)粗粒砂～細礫からなる。埋土は第3層と近似しており検出は第4層上面で行ったが、南壁での断面

観察の結果、1溝は第3層内の遺構であるとみられる。

第4層以下では第5・7層で暗色化が観察されたが、遺構・遺物は検出されなかった。第4層は灰色(10Y5/1)粘土からなり、層厚は15cm程度である。暗色帯構成層である第5層は紫黒色(5P2/1)粘土からなる。層厚は6cm程度で、植物根痕跡が観察された。第6層は紫灰色(5P6/1)粘土質シルトからなり、層厚は8cm程度である。下部には鉄分の沈着が観察される。暗色帯構成層である第7層は紫黒色(5RP2/1)シルト混り粘土からなり、層厚は10cm程度である。第8層は紫灰色(5RP6/1)粘土質シルトからなり、層厚は15cm程度である。第9層はオリーブ灰色(2.5GY6/1)粘土からなり、層厚は36cm程度である。第10層は灰色(N4/1)粘土質シルトからなり、層厚は8cm以上である。

第3章 まとめ

本調査では泉大津駅・松ノ浜駅を挟む南海本線沿い約2 kmの間に9個所にトレンチを設定し、地層断面を中心とする調査を行った。

当初、調査地は海成の砂層が発達して形成された砂堆に立地していることが予想されたが、地層断面調査の結果、河成堆積物により扇状地形が形成されていることが判明した。各トレンチの地層断面模式図(図14)を見ると、4-2から4-3トレンチへかけて、各層の水準が大きく上昇している。こうした地形が形成された時期については不明であるが、4-3トレンチの南西約500mには二級河川である大津川が流れていることを考えると、その活動が形成に関与している可能性が強い。大津川の河道の歴史的な変遷については不明な部分が多いが、南流してきた現在の大津川は調査地の手前で大きく西に向きを変えており、より北側を流れていた時期に形成された自然堤防上に、両トレンチは立地している可能性がある。また、その北東に位置する4-1トレンチでは他のトレンチに比べ中世以降の耕作土層が厚く堆積しているが、当該トレンチを中心とする浅い谷地形には自然堤防の後背湿地が広がり、2-1トレンチにかけて暗色帯構成層が発達したものと推測される。

一方、調査地では中世から近代にかけての耕作土とみられる地層が、広範囲に分布していることが確認された。検出された遺構も、溝や落込みなど耕作に伴い形成されたとみられるものが大半を占めている。また、200m程の距離にある紀州街道が整備された近世においてもそうした傾向は変わらず、出土した遺物量は少量にとどまることから、本調査地周辺は中世以降一貫して耕作地として利用されていたと考えられる。それらの耕作土層は下位層から巻上げられたとみられる古墳時代から古代にかけての遺物を多く含んでいるが、古代以前の地層は後世の耕作により削平された可能性が強い。

次に、遺構については前述の通り、主に中世以降の耕作に伴うとみられるものが検出された。1-2トレンチで検出された耕作溝以外の遺構についても、3溝の方位は耕作溝である1溝や2-2トレンチの溝群と共通しており、2・4ピットでは柱痕は検出されていないなど、耕作地としての土地利用と矛盾するものではない。

遺物については前述の通り耕作土層から出土しているためか大半が細片であった。古墳時代の遺物は

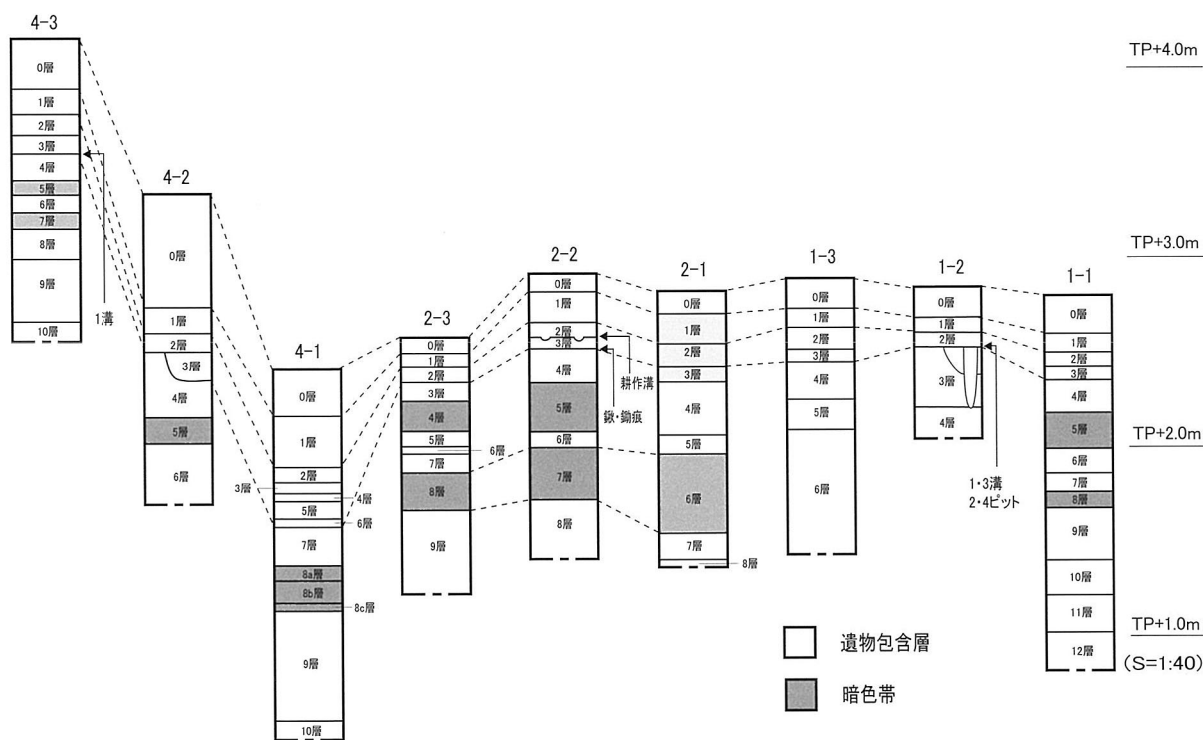


図14 各トレンチの地層断面模式図

後期に属するものが多いが、中期に遡る可能性があるものがごく一部含まれている。中世の遺物には時期を限定できるものが少ないが、11～12世紀の中国製白磁が出土している。近世の遺物では丹波焼や肥前・京信楽系などの陶磁器や瓦が出土している。また、土錘が計11点と多数出土しているが、長さ2.8～4.4cm、孔径0.2～0.4cmといずれも小型のものである。

以上の通り、今回の調査では古墳時代や中世を中心とする遺物が出土したほか、中世以降の耕作に伴うとみられる少数の遺構が検出された。古代以前の地層はそうした耕作により削平を受けたとみられるが、今回の調査結果は、東雲遺跡・助松遺跡など周辺地域の調査で古墳時代や中世に関する成果が多く得られている事実と基本的に整合するものであると考えられる。よりミクロ的には地形の形成や中世以降の土地利用のあり方など、これまで不明な部分の多かった調査地一帯の地理・歴史的環境について、具体的かつ重要な知見が得られたといえよう。

調査地の北西には紀州街道が伸びており、生活に適した比較的安定した環境が海浜側にも続いていたことが推定されるなど、耕作に従事した中・近世の人々の集落が調査地周辺に存在している可能性や、埋積谷など地山の低い地域で古墳時代の遺構が残存している可能性は少なくない。今後、周辺地域における調査の進展とともに、大津川の河道の変遷、古墳時代後期における集落の分布、中世の耕作地の広がりとその主体となった集落の分布など、残された課題が次第に解明されていくよう期待したい。

引用・参考文献

- 泉大津市史編さん委員会2004、『泉大津市史第1巻上』 pp. 353－356
泉大津市教育委員会1987、『泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報5』
1991、『泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報9』 p. 10
1995、『豊中遺跡発掘調査報告書』
大阪府教育委員会1974、『七ノ坪遺跡発掘調査概要』
1980、『第二阪和国道内遺跡発掘調査概報 一板原遺跡一』

豊中・古池遺跡調査会1976、『豊中・古池遺跡発掘調査概報 そのⅢ』
1977、『東雲遺跡発掘調査報告書』

横田賢次郎・森田勉1978、「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」：九州歴史資料館編『九州歴史資料館研究論集4』 pp. 1－26

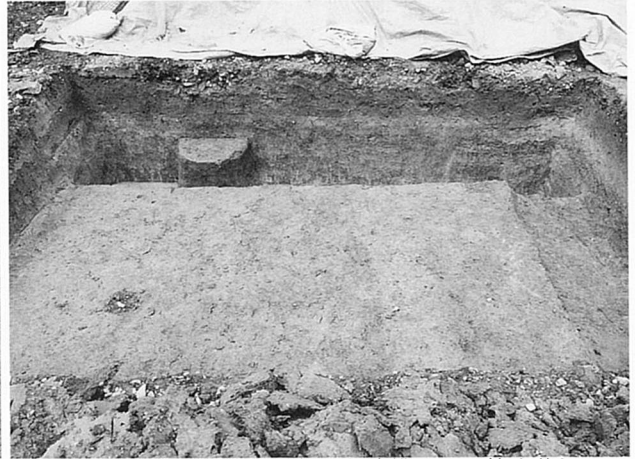
版 圖



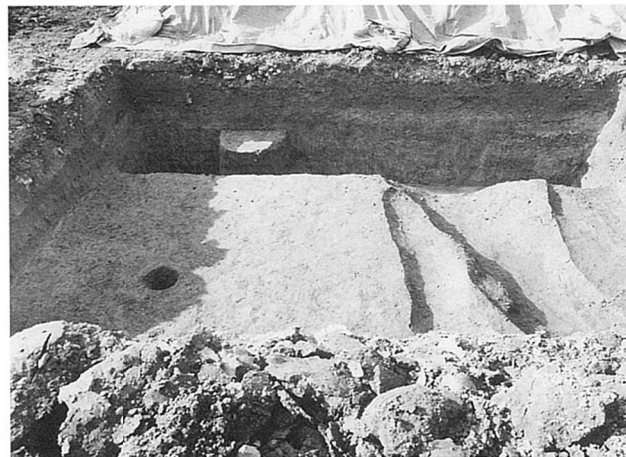
調査地遠景 (南から)



1-1 トレンチ 西壁地層断面



1-2 トレンチ 西壁地層断面と遺構 1~4 検出状況



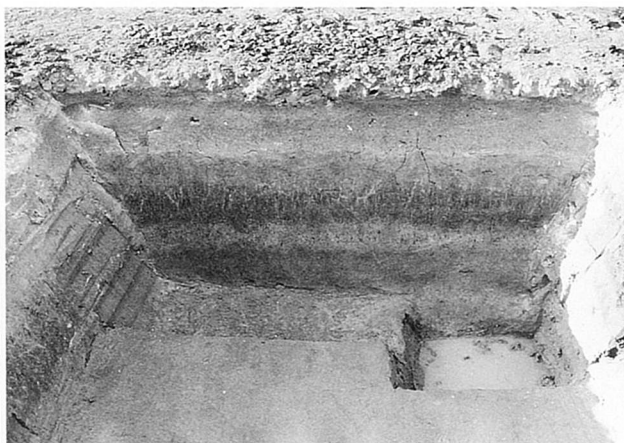
1-2 トレンチ 遺構 1~4 (南東から)



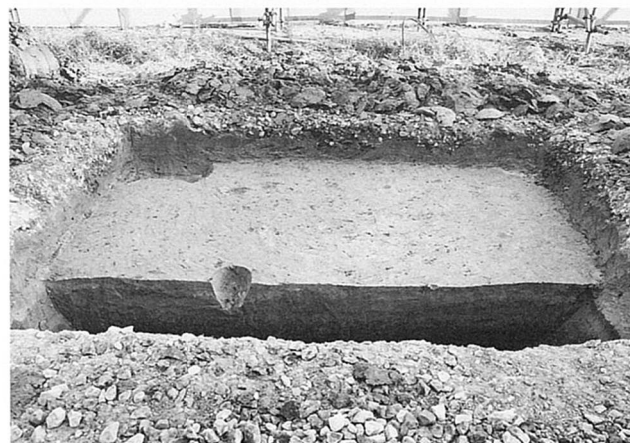
1-3 トレンチ 東壁地層断面



2-1 トレンチ 西壁地層断面



2-2 トレンチ 西壁地層断面



2-2 トレンチ 第2層下面耕作溝検出状況(北西から)



2-3 トレンチ 西壁地層断面



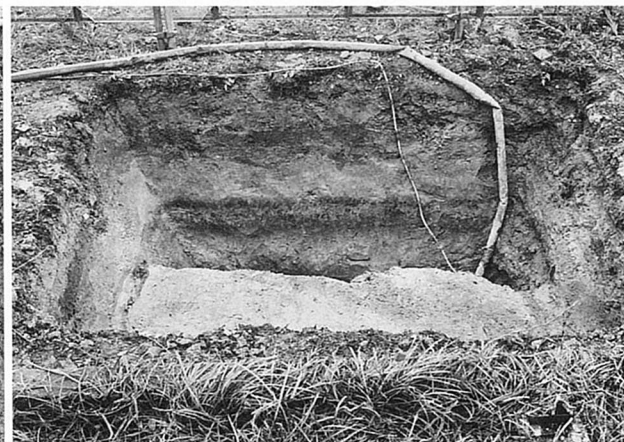
4-1 トレンチ 東壁地層断面



4-2 トレンチ 東壁地層断面



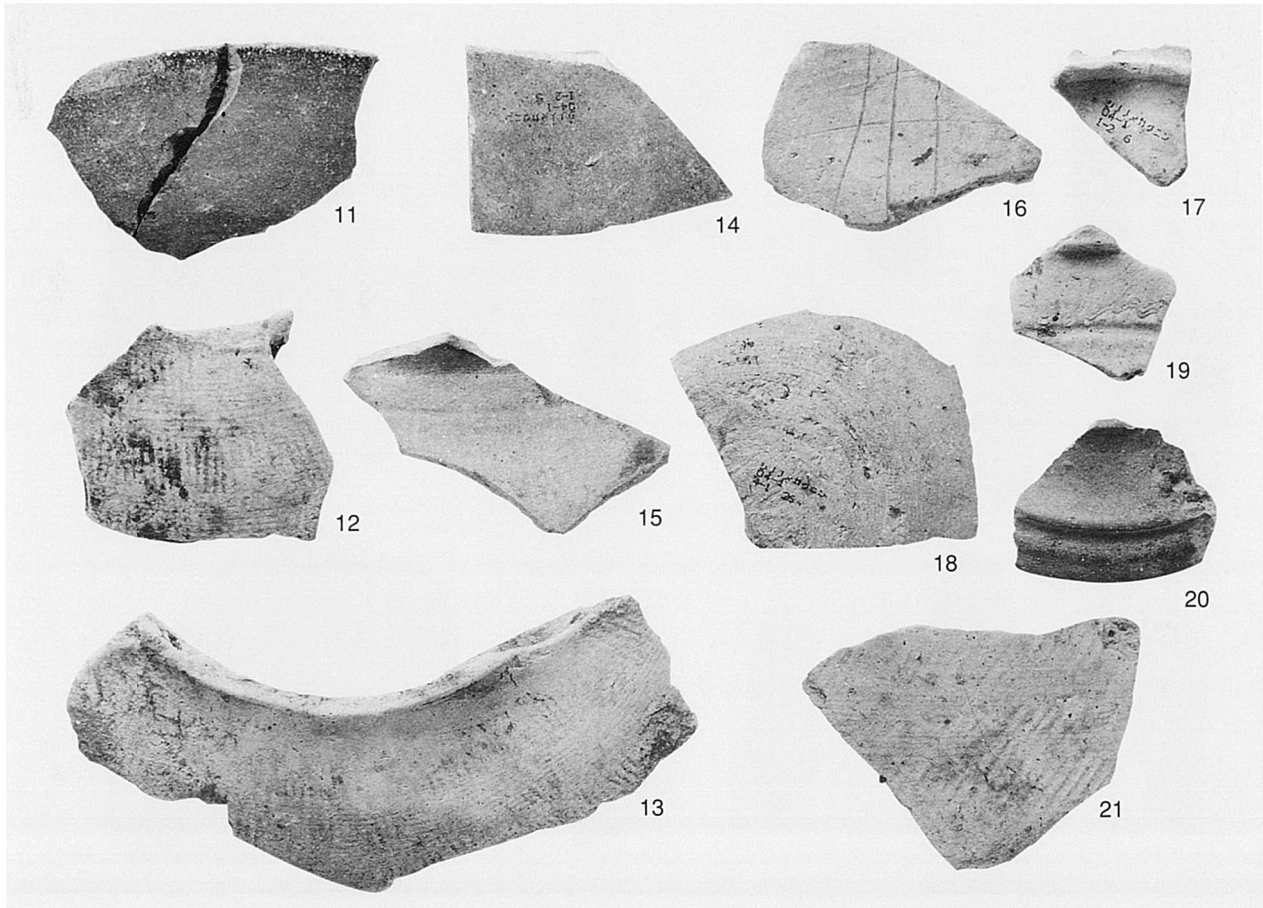
4-3 トレンチ 西壁地層断面



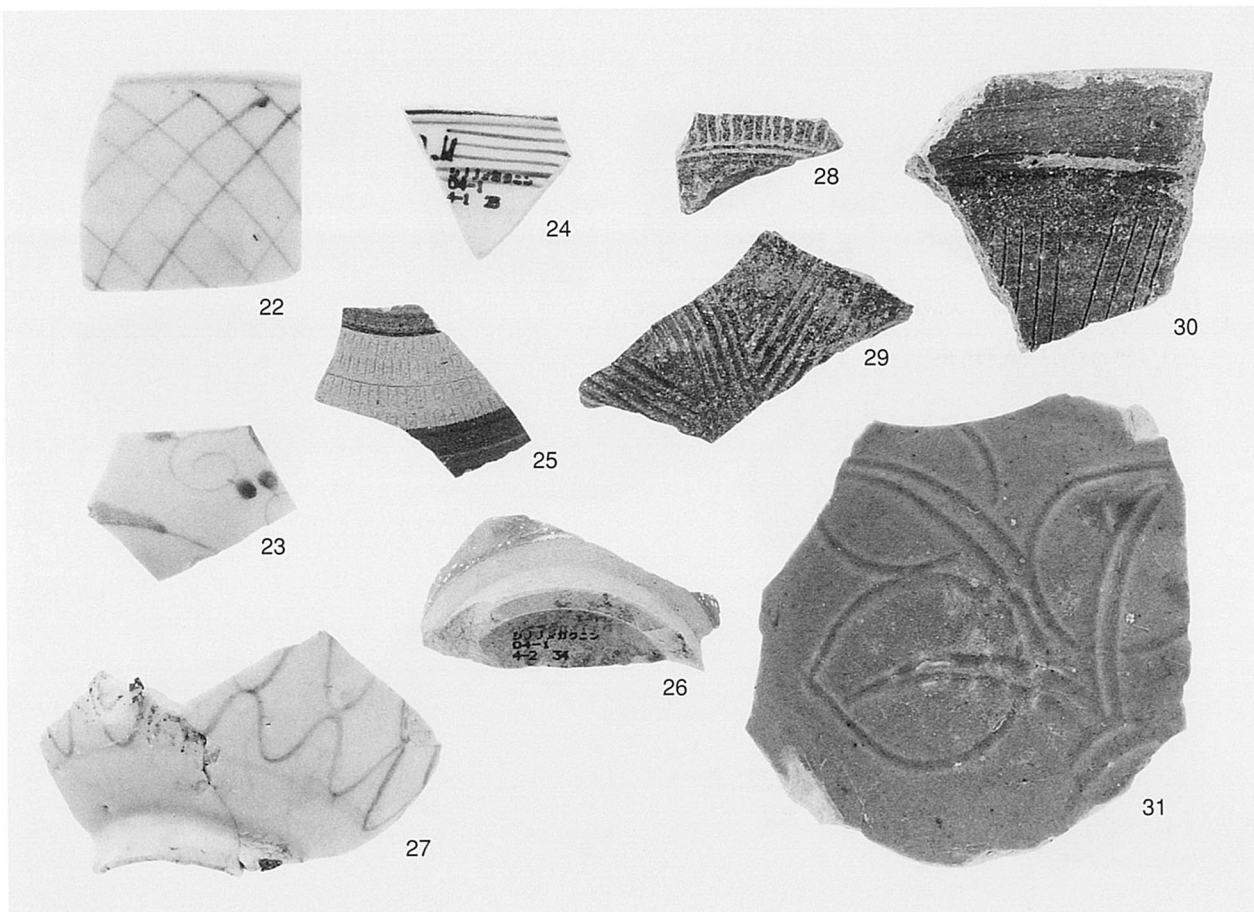
4-3 トレンチ 遺構1検出状況(南東から)



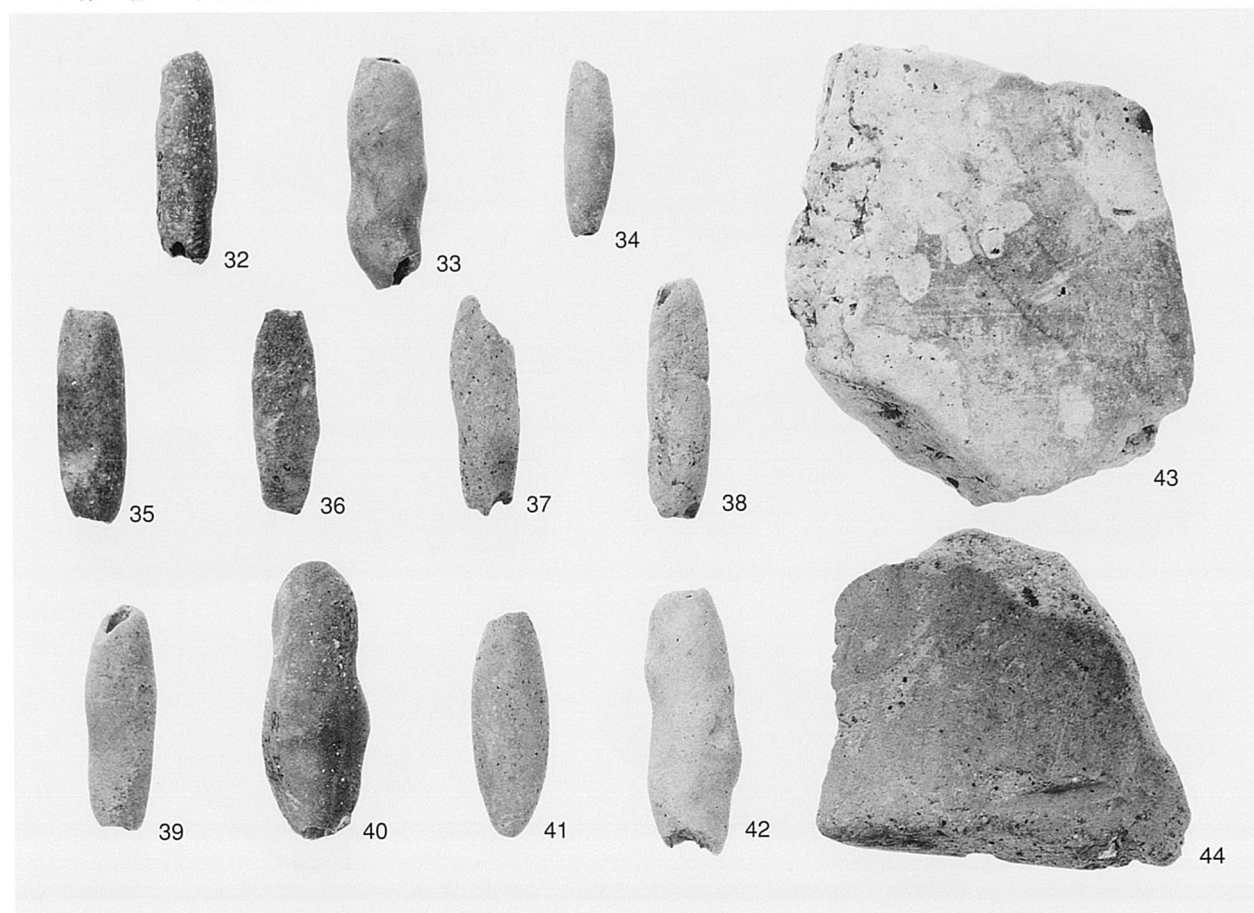
土師器・瓦器・瓦質土器・白磁(1-2トレンチ第2層: 4~6、3溝下層: 1~3 1-3トレンチ側溝: 8 2-2トレンチ第1層: 10、第2層: 9、第3層: 7)



須恵器(1-2トレンチ第2層: 15~17・20、3溝下層: 13・14・19、側溝: 12 2-1トレンチ第3層: 11 4-1トレンチ第2層: 18、第5層: 21)



陶磁器(2-1トレンチ第1層:28 4-1トレンチ第1層:23・24、第3層:30、第5層:27、重機掘削中:25 4-2トレンチ第1層:29、重機掘削中:22・26・31)



瓦・土錘(1-3トレンチ重機掘削中:39 2-1トレンチ第1層:36~38 2-2トレンチ重機掘削中:32 2-3トレンチ第2層:35 4-1トレンチ第2層:44、第3層:33・34、第5層:40~42 4-2トレンチ第2層:43)

報告書抄録

ふりがな	しののめいせきりんせつち						
書名	東雲遺跡隣接地						
副書名	南海本線連続立体交差事業に伴う発掘調査（確認）報告書						
シリーズ名	（財）大阪府文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第119集						
編著者名	池田研・岡田佳之						
編集機関	（財）大阪府文化財センター						
所在地	〒590-0105 大阪府堺市竹城台3丁21番4号 TEL 072-299-8791						
発行年月日	2004年11月30日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		緯度・経度	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号				
しののめ いせき りんせつち 東雲遺跡隣接地	いずみおおつし しきないちよう 泉大津市式内町他	27206		北緯 34°30'05" 東経 135°24'40"	2004.10.04 ～ 2004.10.27	54	南海本線連続 立体交差事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
東雲遺跡隣接地		古墳時代～近世	溝・耕作溝	土師器・須恵器・瓦器・ 瓦質土器・中国製白磁・ 丹波焼・肥前陶磁器・ 瓦・土錘			

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第119集

東雲遺跡隣接地

南海本線連続立体交差事業に伴う発掘調査(確認)報告書

発行年月日 / 2004年11月30日

編集・発行 / 財団法人 大阪府文化財センター

〒590-0105 大阪府堺市竹城台3丁目21番4号

印刷・製本 / 株式会社 明新社

〒630-8141 奈良市南京終町3丁目464番地